
161話 電波な彼女

吉川明人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

161話 電波な彼女

【Nコード】

N0184T

【作者名】

吉川明人

【あらすじ】

いつも電波話をするこいつが、今日はめずらしく現実的な話を始めやがった。

「わたし宇宙人なんていないと思うんだけど、どう思う?」

日曜日の昼下がり、いつもどおりぶらぶら歩いて、目についた喫茶店のパフェを食べるのに付き合わされていたオレに、いきなりそんな質問をしゃがった。

こんなことで驚いてはいけない。

学校ではしょっちゅう何かから電波を受け取って、オレに報告してくるこいつの言動にいまさら振り回されるつもりはない。

こいつにしては、少しまでもなことを言うもんだとオレは逆に感心したくらいだ。

「オレもそう思うぜ。ま、百歩譲っていたとしても、どこか遠い宇宙の話だろうからな」

「そうじゃなくて! よくテレビやネットに出てくるグレイタイプの宇宙人のこと!

あいつらが高度な科学技術を持ってるなんて信じられないのよ」

ああそうかい。それよりあいつらなんて言っていると、いつか連れ去られてしまうぞ。

「考えてみてよ! あいつらハダカなのよ! ジャングルの原住民でも腰巻きくらい着けてるっていうのに、人前の、しかもアメリカ大統領と一緒にいる時でさえ何にも着てないわ! これが人間だったら即、わいせつ物陳列罪よ!」

分かったから喫茶店の中で大声でわいせつ物とか言わないでくれ。

誤解を招く。

「だからね、わたし思うの。あいつらホントはああいう外見の着ぐるみかぶってるんじゃないかって。だってホラ異様に目が大きいクセにまばたきしないし、口だって動いてるところ見たことないもの。あれはサングラスで紫外線から目を守ってて、着ぐるみ越したとものが食べられないけど言葉を出すなら口から人間にとって違和感がないからだわ！」

こいつの言ってることは無茶苦茶だ。いつもそうだというのはこの際どこかに置いておこう。

「おまえ最初に宇宙人なんていないと言ったにもかかわらず、あいつらは宇宙人だと言っているようなものだ」

「そんなのひと言も言っていないじゃない。あんな変なやつらがいる、だけど宇宙人なんかじゃないって言ってるの！」

「違いがよく分かん。だったらおまえはあれがなんだと言っただけ？」

「決まってるじゃない！ 地球人が作った宣伝用の目くらましよ」

「ほーう。おまえにしては現実的じゃないか。オレはてつきり未来人とかなんとか言い出すかと思ってたぜ」

「未来のわたしがあんな気味の悪い姿になってたまるもんですか」

いや、別におまえがなるワケじゃないぞ。

「そもそもひと昔前に流行った宇宙人にはグレイだけじゃなく、いくつ種類がいたはずなのに、いつの間にかグレイだけになってるなんてつまらないじゃない」

また観点がズレているが、ここは黙ってスルーしよう。

「だいたい科学者や政府って、本当はとっくにもの凄い技術を持つてるはずなのよ。」

それが意図的に開発されたものなら、今の物理法則や経済活動をまるごとひっくり返して大パニックを引き起こしかねないから発表できない。

偶然できた技術なら、利用できても原理の解明ができなくて応用がきかない。解明するためにはたくさんの実験を繰り返さないといけなくて、たまたまそれを見た人の目撃情報が出てくるのよ。

どっちにも共通するのはお金よ。

自分たちの経済基盤を揺るがしたくないことと、技術が政府の内部から外に漏れて民間企業で原理を解明されたら莫大な損失につながるわ。

ところが、これが宇宙人の技術だなんてことにすれば、訳が分からなくて当然だし、民間企業も宇宙人の技術だなんて利益になるかどうかも分からないものに費用をつかうわけにはいかないでしょう」

なるほどな。一応筋は通っている……いや、ちょっと待て。

いつもこいつの電波話を聞かされているせいで、少し納得できそうな話を聞いただけで信じそうになっているぞ。

「その話が本当だとすると、今この瞬間も未来を信じて研究や開発を必死に進めている研究者や技術者に失礼じゃないか。」

おまえはそんな人たちの努力や苦労も考えず、憶測だけでいい加減なことを言うつもりか」

少しかわいそうだったが、つい引き込まれそうになったオレ自身をごまかすために言ってやった。

だがこいつはオレの返事を聞いて素直にうなずいた。

「そうよね、悪かったわ。もうこの話はしない。」

そんなことより昨日の晩、ついにリグリメア星の第7王女アレス

テロア様からの使者が来たのよ。それによると、今度わたしをリグ
リメア星に招待して、パーティーを開いてくれるそうなの。

その時にパートナーを1人連れて行ってもいいって言われたから、
あんた一緒に来てよ」

「おまえなあ、今の今まで宇宙人なんていないって言ってただろう
が。それになんだそのリグなんとかって星は。初設定だな」

「ずっとコンタクトし続けてやっと応えてくれたの。ねえ、行くで
しょ?」

「はいはい。その時は呼んでくれ」

オレのテキトーな返事にこいつは目を輝かせていた。

「……で、ここは一体どこだ?」

「だから約束したじゃないの! リグリメア星のパーティーに行く
時は、パートナーとして来るって」

「確かに言った。それは認める。だが、どうやってここに連れて来
たんだ?」

「それはまあ、リグリメア星の科学力で、後ろからガンと……」

「後ろから殴るのがどこが科学力だ! しかも、こんなウミウシど
もの集会だなんて聞いてないぞ!」

「ナイスよ! 相手から顔をそむけて指さしながらそう言うのが、
招待された相手に対する最高の賛辞なのよ! ほら見て、みんな喜
んでるじゃない」

オレにはどうやっても、カラフルなブヨブヨどもが激怒している
ようにしか見えない。

「それよりあれ見て! あれってグレイじゃない?」

本当だ。まるで当たり前のようにいやがる。いや、ちょっと待て。なんだか見慣れた外見が、服を脱ぐようにシワシワになって、中から……。

「うわっ！ なに？ かわいい！！」

中から出てきたのは、白くてモフモフした毛並みの、アルパカとハムスターを足したような、大きな瞳を輝かせる生き物だった。

「初めっからあの姿で現れてくれたら、いきなり友好ムード満開だったのにな」

「分かったわ！ 地球だと外見が動物に似てて、知能が高いと思われないから、わざとあんなの被ってたのよ！」

ウミウシたちは、こぞってグレイの中身にすり寄っている。

それにしても、どうしてあいつらはあんな不気味な姿を思いついたんだろうか。

「ふふーん、腑に落ちないって顔してるわね。簡単よ。本当の姿も、あのグレイの姿だからよ」

「本当の姿ってなんだ？」

「あんた、毛刈りされた動物見たことない？ パンダだって毛を刈られたらやせっぼちの貧相な姿になるんだから」

「だったらグレイの姿って、あの生き物が毛刈りされたのと同じだっつてことか」

「それ以外考えられないじゃない。さっ！ わたしたちも挨拶に行きましょ」

これまでのあいつの電波な言動に引き回されてきたおかげで、オレはこんな状況にさえすぐ馴染んでしまっている。まったく良かった

たんだか悪かったんだか。

まあ、今はいい。何がどうあれ今はこれは現実だ。

だが無事に帰ったら、あいつはますます自信を持って電波の話をするに違いない。

これが一切合切あいつの夢だったってことにはならないだろうか？

それなら簡単だ。

この場所にはグレイがいるじゃないか。

オレはできるだけ丁寧にグレイへ挨拶することにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0184t/>

161話 電波な彼女

2011年10月6日20時45分発行